

バスケ部が、ほぼ毎日のように練習をしているというのは、彼女でも知っていた。

つまり練習場所に行けば、彼に会えるというわけだった。

それで、その日の講義が終わるや否や、すぐさま体育館へと向かった。

しかし行ってみると、そこで練習をしていたのは、バレー部とバトミントン部で、バスケ部のメンバーはカゲも形も見当たらない。

道行く人に声をかける勇気もなく、ただうろうろと、体育館のまわりを行ったり来たりしていた彼女は、ふと、第二体育館の存在を思い出した。そこは、彼女の所属する研究室の隣にある建物だった。

そういえば、よくあそこから、床を鳴らすような音が聞こえていたような気がする。そうかあれは、バスケ部が練習していたのか。

研究室に行くのは、日課だった。彼女はそのまま方向転換した。

そのときだった。

「あれ？」

聞き覚えのある声が、背後から聞こえたような気がしたのは。

振り返ると、タオルを首にかけた彼が、汗をふきながら、彼女をみていた。

「もしかして、このあいだの」

言いながら、近づいてくる。そして、彼女が手にしていたものに、気がついた。

「わざわざ返しに来てくれたの？」

あまりに意外そうに言われたので、彼女は少しムツとした。

「だったら、悪いですか」

「いや、驚いただけ。あんなに反抗的だったのに、って」

「借りたものを返すのは、当たり前です」

「よくわかったね」

そういつて彼は、からかうようなほほ笑みを浮かべた。

「オレのこと、調べたの」

「違います！」

「そんな全力で否定しなくても」

言葉とは裏腹に、彼はどこか楽しげだった。

「と、とにかく、ちゃんとお返ししましたから！」

彼女は一方的にそう言うと、傘を押し付けるように渡した。

が、ここで、予想外のことが起こった。

「いない」

彼が、傘を受け取ろうとしないのだ。

そんな展開を、これっぽっちも考えていなかった彼女は、ぎょっとして彼をみた。

「なにいて……」

「これはあなたにあげたものだから。返されても、困る」

「こ、こっちだって、もらう理由ありません」

「はあ？」

彼はあきれたといった声を出し、少し首をかしげて彼女を見つめた。

「あのね、女の方は、いちいちプレゼントをもらう理由なんて、考えなくていいの。男はあげたいからあげるんだから、ありがとうってもらっておけばいいんだよ」

彼女は黙って彼の言葉を聞いていたが、まったくもって理解不能だった。

それで数回瞬きすると、おそろおそろ言ってみた。

「いわれている意味がわからないので、もうすこしかみくだいてもらえるとありがたいのですが」

彼は、信じられないといった目を向ける。

まじまじと見つめられ、彼女は非常に居心地が悪かったが、ここで目をそらしたら負けだ、と必死に言い聞かせ、耐えた。

そのうち、ようやく彼女が冗談でいっているわけではないとわかったのか、彼は頬をゆがめるようにして笑った。

「ああ、ごめん」

それだけ行って、黙り込む。別にあやまって欲しいわけではないのだと言おうとしたが、彼の表情が、どこか頑なにみえて、それ以上何かいうのがためらわれた。

なんとなくどちらも口を開けずにいると、やがて遠くから彼を呼ぶ声がした。

「いつまで休憩してるんだ、イツキ！ 次のゲームは始めるぞ！ 早く来い！！」

彼女はつぶやくように言った。

「バスケ部……じゃないんですか」

「所属はね。けど、いろいろやってる」

その声は、最初に会ったときのように、淀みなく響いた。

「メインはバスケだけど」

「そんな……中途半端なんですか」

気がつくやうに、そう口に出していた。

彼は驚いたやうに彼女をみた。

けれども彼女は、自分の考えを言葉にするのに精一杯で、それに気づかなかった。

「わたし、感動したのに。今朝、あなたの記事を見て、写真を見て、すごくバスケが好きなんだなって。すごく一生懸命なんだなって。こんなふうに夢中になれるものがあるのって、いいなって、そう思ったのに」

「そういうことは、オレの顔をみて言ってよ」

ふいに手首をつかまれた。

「ダメだよ、下を向いてちゃ。せっかくの気持ちが伝わらない。ほら、こっちをむいて」

それで、おそろおそろ顔をあげると、彼のやさしげな視線にぶつかった。

「ありがとう」

彼は、ぼつりと言った。少し照れたように。

「そんなふうに言われたの、はじめて」

「うそ！」

彼女は大きく首を振る。

「だって、ファンクラブがあるんでしょう。わたしなんてたまたま今朝、ファンクラブのビラを見ただけで、それでただ思ったこと言っただけなのに」

「・・・・・・・・あなたって」

そのとき、再度彼を呼ぶ声がした。

「イツキ！ 早くこいよ！！ いつまで女を口説いてるんだ！？」

明らかに先ほどよりトーンがあがっている。

一樹は、苦笑いした。

「ごめん、もう行かないと」

手が、離れる。彼女は突然自由になった手首の重さを、持て余した。

「それじゃ、またね」

軽く手をあげてそういと、彼はもう振り返らなかった。

彼女は、その精悍な背中をみつめながら、ぼんやり思った。

またね、なんて、ありふれた社交辞令。

自分は彼にとっては、その他大勢にすら入らないのだろう。

ファンクラブさえ作ってしまえるほどの人気者と、関わる機会なんてもう二度とない。

そんなのは、とっくにわかっていた。

むしろ、関わり合いになりたくないと思っていたくらいだ。

なのに、どうしてだろう、もっと彼と話してみたいと思うのは。

彼が何を言いかけたのか、知りたいと思ってしまうのは。

自分の気持ちがわからない。

こんなのは、生まれて初めてだった。